
或る奇妙な友情

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る奇妙な友情

【NZコード】

N5192A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

次の日曜、俺は人を殺す事になつたーガキの頃から続いた力関係。同じくらい狂つている広樹と雅也は健にクラスメイトの殺害を命じた。逆らえば死ぬ。受け入れれば豚箱へ。選択の余地ー何処にもなかつた。健は一人を憎みながら、脱出不可能の迷宮へ墜ちていくー。

或る奇妙な放課後

今度の日曜、人を殺す事になった。ジャンケンで負けたからだ。俺はグー。広樹と雅也はパーを出した。口裏を合わせたに違いない。俺が勝つたら、その勝負はきっと無効になつていた。

広樹と雅也は同じくらい頭が良くて腕つ節が強かつた。そして同じくらい狂つてた。俺は頭も腕も並だった。だから人を殺す事になつた。

「解つてるな？遠藤に告つたら、いつもの公園に連れてくるんだ。包丁で脅かしたら、その場で犯せ。犯したら殺す。簡単だろ？？」放課後の教室で広樹が面白そうに笑つて言った。

広樹の隣で雅也は煙草をふかしてた。窓から夕陽が射し込んで、煙を照らしていた。やけに神秘的に写つた。

「何ぼーっとしてるんだよ健」

雅也の声一気だるそうだつた。煙草を床に踏みつけて、俺の肩を叩く。

「そんなんで成功するか？解つてるよな？失敗したら…」

俺の腹に雅也が触れた。学ランの下、裸の腹筋には四針縫つた十字架型の傷がある。広樹が横、雅也が縦に付けた。

「こつから内臓取り出すぐ？」

雅也の笑顔。ぞつとした。比喩ではなかつた。

俺は拳を握り締めた。雅也を殴る。その後で広樹を殴る。頭につもののイメージが沸く。実行一出来る筈なかつた。やればこの場で俺が殺られる。想像で満足するしかなかつた。

「雅也、あんまり健をいじめるな。こいつは怒るとすぐに泣く」広樹の声。小学校を卒業するまでは泣いた。中学を卒業する頃には泣かなくなつていた。高校二年の今となつては涙の存在を忘れていた。

俺の中にあるものー広樹と雅也に対する憎しみだけだ。

「とにかく日曜日だよ、健。しくじつたらお前は終わりだ」

雅也が煙草に火を点けた。扉が開く音。見回りの教師が俺達を見ていた。雅也は煙草を隠す事なく、教師を睨みつけた。広樹—雅也から煙草を受け取り火を点けた。それを俺に渡した。

「せつかくだから、健も吸えよ」

煙草は苦手だ。俺は断つた。断りきれなかつた。俺は吸つた。咳き込んだ。

「先生、何か用ですか？」

広樹が言った。

「俺達、健に無理矢理煙草吸わされてんすよ」

雅也が言った。

「本当か、杉浦」

教師が俺の名字を呼んだ。本当じゃない事など解りきつてている筈だった。

広樹と雅也の視線。肯定を促す。俺の意志一否定を促した。

「本当です」

視線に負けた。拳を再び強く握った。

「明日、職員室に来なさい」

教師が扉を閉めた。牢獄の閉まる音がした。

初恋の変換

帰り道で遠藤に会つた。遠藤は俺と同じ団地に住んでいる。

広樹と雅也、俺と遠藤。小学校から今までずっと一緒にいた。

遠藤加奈子。俺の初恋の相手。広樹と雅也の初恋の相手。二重ではつきりした目。艶やかな唇。白というより純白の肌。長く、纖細な髪。ガキの頃から遠藤は妖艶だった。

「健」

遠藤が声をかけてくる。俺は聞こえないふりをした。

「健つてば」

遠藤に肩を掴まれた。振り返った。

「シカトはないんじやない？」

商店街の一画。遠藤は買い物袋を下げていた。今日の夕食。父の食事を遠藤が作っていた。遠藤の家には母がない。中学三年の時、殺された。犯人は捕まつた。真犯人は捕まらなかつた。

真犯人－広樹と雅也。俺以外にそれを知つてる奴はない。

「気付かなかつたんだ」

「いつから平氣で嘘をつける様になつたんだろうねえ、健君は」「考え方をしてたんだよ」

「何？恋でも始めちゃつたわけ？」

「お前には関係ないよ」

関係あつた。俺は遠藤を殺す。次の日曜。今日は木曜。三日後だつた。

「つれない事言わないで、おねえさんに相談しなさい」

遠藤が買い物袋を俺にぶつけながら言つた。携帯が鳴つた。ディスプレイの表示－広樹。

遠藤がそれに気が付いた。顔に不穏が宿る。俺は通話ボタンを押した。

「はい」

「健、遠藤を殺すのは口曜だ。今勝手に殺る気じゃないよな？」

愉快そうな広樹の声。背後に視線を感じる。振り返った。遠藤の死角、商店街の出口の角に、広樹と雅也を見つけた。俺を尾けていた。

「解つてると」

「だつたらいいが、変な事企んでると、お前が先に痛い目見る事になる。友達を痛い目に合わせたくないんだ」

雅也の笑い声が聞こえた。

「解つてる。これは偶然なんだ」

「ならいい。また明日な」

通話が絶たれた。隣で遠藤が心配そうな顔をしていた。俺は歩いた。家の方向へ。広樹と雅也の反対方向へ。

「健、大丈夫？まだ、広樹と雅也…」

俺は遠藤を睨んだ。遠藤は黙った。胃がむかむかした。

一週間前、広樹が遠藤に告白したーふられた。

一週間前、雅也が遠藤に告白したーふられた。

遠藤が二人をふつた理由。

遠藤は俺が好きだった。俺の初恋ー憎しみに変わった。遠藤が一人をふらなければ、どちらかと付き合つていれば、俺の事を好きだと二人に言わなければー。

俺が遠藤を殺させられる理由も無かつた。

広樹と雅也

家に帰る前に煙草を買った。広樹と雅也が好んでいる銘柄だった。団地の広場一ライターが落ちていた。拾つて煙草に火を点けた。咳込んだ。もう一度吸つた。咳込んだが、苦しさが薄れていた。

家に帰つた。お袋に煙草臭いと怒鳴られた。「うるせえと怒鳴り返した。部屋に入った。ベッドの上一頭を使つた。

俺と広樹と雅也。そして遠藤。小学校から一緒だった。ガキの頃、広樹と雅也は仲が悪かった。お互いの口癖一

「あいつは俺より弱いのに調子に乗つてるんだ」

健もそう思うだろう? 口癖の後で、必ず広樹と雅也は俺に言つた。俺はいつも曖昧に頷いていた。広樹と雅也は俺を取り合つていた

小学校五年の夏。

地元の河川敷で広樹と雅也が大きな決闘をした。敗者は勝者の下僕になる。ルールはそれだけだった。俺と遠藤が立ち会つた。殴りあい、蹴りあう。ガキの喧嘩には見えなかつた。広樹と雅也の喧嘩は、プロ同士の格闘技の試合の様に、動きに一切の無駄が無かつた。ガキ特有のガムシャラさが無かつた。遠藤は泣いた。

「二人を止めて」

俺に懇願した。

俺一動けなかつた。

広樹と雅也はお互に口や鼻から血を流していた。目を腫らしていた。

広樹が雅也を殴る。

雅也が広樹を蹴つた。

全くの互角。こいつらはお互に死ぬまで殴り続ける。俺は本氣でそう思つた。

均衡を破つたのは広樹。短パンのポケットからカッターを取り出した。安っぽい刃。それでも刺せば血は流れる。広樹は勝ち誇つた

笑みを浮かべた。

「どうする雅也？俺は刺すよ？知つてるだろ？」「

雅也が呆然とカッターを眺めた。その後笑った。

「嫌になるぜ広樹。考へてる事も一緒じゃねえか」

雅也が短パンのポケットに手を突っ込む。カッター。安っぽい刃。どちらか、あるいは両方死ぬ。俺は本気でそう思った。遠藤が口を押さえた。悲鳴。広樹と雅也が同時に遠藤に視線を移す。

「遠藤が叫ぶと、人が来ちゃうな」

広樹が言った。

「ああ、それは不味いよな」

雅也が言った。

二人はお互いの視線を元に戻した。

「引き分けだな」

一人が言った。合図無しに、一人は同時にカッターを捨てた。何故か二人とも笑っていた。

遠藤に今日の事は一切他言無用と、広樹と雅也が釘を刺し、俺を含めた三人で家に送った。

その後、俺は再び広樹と雅也に河川敷へ連れていかれた。

「引き分けってのもつまんねえよな」

雅也は俺を見ながら言った。

「そうだな。俺達はお互いを下僕にしようとした訳だからな」

広樹も俺に視線を移した。背筋に悪寒が走る。

「知ってるか雅也。健はよく、お前の悪口を俺に話してた」

俺は目を反らした。広樹は何を言っている？

「そりや奇遇だ。俺も広樹の悪口を健から聞いた事がある」

二人の視線が俺を追つてくる。夕焼けが二人の影を俺に被せるよう投射した。動く事が出来なかつた。

「健、お前意外と天邪鬼なんだな」

雅也が近付いてくる。痣だらけの顔。瞼に焼き付いて、今尚離れない悪鬼の顔。

雅也に続いて広樹。一人の悪鬼が俺に迫つてくる。

「雅也。勝負は引き分けだ。でも賞品は分けないか」

「お前の事は大つ嫌いだかよ広樹。考へてる事はいつも一緒だ」

広樹と雅也。目を合わせた。笑つた。

逃げる。

ガキなりの防衛本能が俺の頭の中に響いた。背を向け、走り出そうとした。無駄だった。雅也に髪の毛を捕まれ、そのまま引き倒される。仰向け。頬に痛み。雅也の拳がめり込んだ。

「どこ行くんだよ健？」

鼻に衝撃。鼻水がとめどなく溢れた。勘違いした。鼻血だつた。

「健、今日からお前、俺達の下僕だ」

雅也が俺の体に跨つた。もがいた。痛みが加わるだけだった。もがくのを止めた。

「奴隸には、印が必要だろ、雅也」

側に立つていた広樹。俺達から離れ、地面を探りだした。何かを拾つた。

安物の刃一。

恐怖が体中で暴れた。叫んだ。雅也に殴られ、口を塞がれた。鼻血のせいで息が出来ない。苦しい。しかし、そんな事はどうでもよかつた。俺の意識は広樹の持つ安物の刃にしか反応していなかつた。

「雅也、健の腹を出してくれ」

「お前の言う事なんか聞きたかねえが、それは俺も賛成だ」
雅也が俺のシャツをめくる。裸の腹が空氣に触れた。恐怖が倍増した。

「いい子だから静かにしなよ健。動くと痛い」

広樹は笑つてさえいなかつた。

「これから、お前に印をつける。俺と雅也の下僕の印だ。友達だった健とは、今日でお別れだよ」

腹に痛み。屈辱も恥辱も無かつた。俺はカッターで腹を裂かれても、広樹と雅也を睨う事すら出来なかつた。恐怖だけが、この時、

本冊子は、この回りに亘るアーティストの活動をまとめたものである。

苦悩と諦め、閃きへー

金曜の授業は全く耳に入らなかつた。結局、いい案が浮かばない。広樹と雅也は最後尾の席に隣合わせに座つてゐる。俺は中盤。遠藤は最前列だつた。

遠藤を殺さないと、俺は広樹と雅也に殺される。

遠藤は俺の事が好きだつた。

広樹と雅也は遠藤の事が好きだつた。

俺は全員が憎かつた。

腹の傷の一件以来、文字通り俺は広樹と雅也の下僕になつた。傍目には、あるいは仲の良い三人組に写つたかもしれない。

広樹と雅也は周到だつた。誰かに俺に対する暴力を見せる事はない。ただ、何となく気付いている奴はいた。それだけだつた。

殺される。

二つの選択肢。どっちも糞だつた。殺されれば糞みたいな人生が糞まみれで幕を閉じ、殺せば糞みたいな人生が、さらに糞にまみれるだけだ。

広樹と雅也は前に人を殺してゐる。遠藤の母だ。俺はそれを見ていた。

共犯者。

広樹と雅也はその時俺にそう言つた。俺に逃げ場など何処にもなかつた。

放課後、広樹と雅也と共に地元のゲームセンターへ言つた。

二人はパンチングマシンに興じた。広樹が3ポイント雅也を上回る。ふてくされた雅也は便所で俺の腹を三度殴つた。

吐いた。俺の人生は糞だけでなくゲロにもまみれてる。

拳を強く握つた。ありつたけの憎悪を込めて。雅也に睨まれた。憎悪は簡単に恐怖に食われた。

「そろそろ日曜日の段取りを考えようか」

帰り際に広樹が言った。

「そうだな。健が豚箱入んのはいいけど、俺達までばれちまつたら話にならねえ」

「問題は死体をどうするかだ」

「それなんだよな」

「色々考えたんだが、一つ面白い方法を思いついた

「聞かせろよ広樹」

何も考えたくなかつた。何も聞きたくなかつた。俺はただ歩いた。

俺の人生一糞とゲロの上を。

「…相変わらず最高に狂つてるじゃねえか広樹」

「お前だつて、その内思い付いていただろ雅也」

「どうだかな。そこまで頭回らねえぞ俺は。おい健、聞いたか？最高じやねえか？おい健。てめえ何ぼーっとしてんだ！」

頭をこづかれる。我に返つた。

「てめえ、何も聞いてなかつたのか？」

「聞いてなかつた。

「ごめん」

膝を蹴られた。本気ではなかつた。

「許してやれよ雅也。聞いてようが聞いてまいが、健は従うしかないんだ」

雅也が広樹を睨んだ。

「広樹、おめえいつから俺に命令出来る様になつたんだ？ああ？」

立ち止まつた。辺りは夜の住宅街。人気はなかつた。

「命令じやない。意見だろ？そんな事も解らないのか雅也？」

広樹の口調に皮肉が混じる。雅也の眼光が鋭くなつた。パンチングマシンで負けた事が尾を引いていたらしい。

雅也が広樹の胸ぐらを掴んだ。広樹は雅也の髪の毛を掴んだ。

「何熱くなつてるんだよ、雅也？」

クールな広樹の声。キし始めている証拠。

「何余裕ぶつてんだこら。広樹？」

怒鳴りに近い雅也の声。キレてる証拠だつた。

一人が揉めるのはあの決闘以来初めてだ。俺は驚いた。

二人は睨みあつたまま膠着状態を続いている。

何故今更になつて？俺は考えた。

考えればすぐに解つた。広樹と雅也は仲が良くなつた訳じやなかつたのだ。お互の憎しみを俺に転換する事で何とか衝突を避けようとしていた。衝突すれば最後、どちらかが死ぬまで殺しあう。お互いの力量をお互いが理解していたから、死というリスクを回避する為に俺を利用していた。

俺によつて保たれていた均衡が崩れかけている。

俺が遠藤を殺すから？

違う。

遠藤を殺した俺をこいつらは殺すつもりなんだ。

下らない。何故今まで気が付かなかつた。広樹と雅也は遠藤に惚れていた。その遠藤が俺に惚れているんだ。俺が遠藤を殺したところで、許す筈がない。

俺を殺せば、俺というよりしろから解放された一人の憎しみは元の場所へ返る。広樹と雅也は、もうすぐ俺を失うという状況に無意識に戸惑いを感じて不安定になつてているんだ。利用しない手はない。

頭の中で声が聞こえた。

広樹と雅也はそのまましばらく動かなかつた。一人を眺めた。少しだけ笑顔になれるそな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192a/>

或る奇妙な友情

2011年1月4日00時52分発行